

## 講演と討論

熊谷博子，神谷雅子，池内靖子（パネラー）

池内 それでは、第Ⅱ部を始めたいと思います。

今日はお忙しいところ、たくさんお集まりいただきありがとうございます。私はこのパネルの司会をさせていただきます、立命館大学産業社会学部の池内です。よろしくお願いします。

今日、先ほど第Ⅰ部のほうで、『三池 終わらない炭鉱の物語』という素晴らしいドキュメンタリー映画を見せていただきました。熊谷博子監督に今日はお越しいただいています。もう一人、お隣に座っておられるのが、私の同僚の神谷雅子さんですが、神谷さんは、みなさんもご存じのように、京都シネマの経営者、社長さんです。

神谷さんと熊谷さんは、映画関連のいろんな企画をこれまでもずっと一緒にやってきておられますので、今日はお二人のほうから、その方面のお話もしていただけるのではないかと思います。

私、今日の企画に関わりましたのは、実は、私自身が炭鉱の生まれ育ちであるということもあって、そのことに対する個人的な思い入れがあったからです。私の故郷は、崎戸という、みなさんご存じではないと思いますが、長崎県の離島で炭坑の島です。これは佐世保から2時間ほど船で行ったところにあるんですが、炭鉱関連の本とかを読みますと、必ず「悪名高い崎戸炭坑」ということで、名前が出てきます。

「一に高島、二に端島（軍艦島）、三で崎戸の鬼ヶ島」というふうに言われ、一、二にいろんな炭坑の名前が出てきて、三に「崎戸の鬼ヶ島」というのは変わらないんですね。たとえば、「一に豊津、二に泉水」だったりして、「三で崎戸の鬼ヶ島」というふうに締めくくられるんですが、いわゆるそういう過酷な労働を強いる、圧制の炭鉱で、たくさんのケツワリといますが、逃亡者を出したり、リンチをしたり、労務管理の厳しい監獄のような島だったというふうに言われているんですね。

私自身は幼いとき、そういうことがその島で起こっていたという戦時中のことは知りませんでした。友だちにはたくさん在日朝鮮人がいましたけれども、いわゆる強制連行の現場でもあったその島で、戦後、生まれ育ったのですが、この炭鉱の物語というのは、非常に心打たれるドキュメンタリーでした。

そういうことで、私自身も、あとでちょっと触れることができるかと思いますが、みなさんのお手元に、「私のふるさとと炭鉱だった」<sup>1)</sup>という1枚もののエッセイがあると思います。これは実は、神谷さんたちと一緒に、従軍「慰安婦」について作られたドキュメンタリー映画『ナムの家』（ビョン・ヨンジュ監督、1997）の上演運動をしたときに、1冊、小さなパンフレットみたいなものをつくりまして、そのなかに書かせてもらったものなんですね。あとのお話のなかで、時間があれば、私のふるさとと炭鉱についても少し話をさせていただきたいと思います。

それでは、ちょっと自己紹介が長くなりましたが、最初に熊谷さんのほうに、なぜ、いま『三

池『終わらない炭鉱の物語』というドキュメンタリーを作られたのか。これは、この映画の中ですでに、監督自身が、この映画にかける思いや、地底の底からの風を聞きながら作っていくというような感じで、もう充分語られていたと思うんですが。

また、いろんなところでインタビューを受け、そういう質問が繰り返しされていると思うんですが、きっかけとか、出会いとか、たくさんのドキュメンタリーを制作しておられるなかで、三池という炭坑を選ばれた、そのあたりの話から、ちょっとお聞きしたいと思います。

**熊谷** 今日は見えていただいて、ほんとうにどうもありがとうございました。

立命館大学というのは、Ⅰ部、Ⅱ部、Ⅲ部と、すごく迫力のあるディスカッションをやるのだなとびっくりしています。

なぜこの映画をつくったのかという話ですが、私自身は東京に生まれて育ちましたので、炭鉱のことはほんとうに何も知りませんでした。三池炭鉱の閉山が1997年の3月30日です。閉山して1年たったときに、大牟田市で、「歴史を生かしたまちづくり」というシンポジウムをすることになりました。炭鉱がなくなるということは、経済の問題とか、いろいろなことがありますけれども、単に炭鉱がなくなるというよりは、コミュニティーがごっそりとなくなるということだと思っています。

その中で、これだけ炭鉱で生きてきたまちの人たちなので、自分たちが生きていく誇りみたいなものまで失ってしまうという、そんな状態になっていました。

ただ、幸いにして大牟田のまちのなかには、この映画に出てくるような、近代化遺産と呼ばれる古い建物がたくさん残ってしまっていて、それを生かして何かできないだろうかということのアイデアがありました。

以前、私が『ふれあうまち 向島・オッテンゼン物語』（1995）という、東京の向島と、ドイツのハンブルクのオッテンゼンという下町を舞台にして、人々が古いものを壊さずに生かして、どうまちを育てていけるのかというテーマでつくった映画があります。それを見ていた方が私をシンポジウムに呼んでくださいました。

そして、この映画にもありますけれども、初めて宮原坑という炭鉱の跡に足を踏み入れた瞬間に、ほんとうに下から働いていた方の声が聞こえてきたような気がしました。ドキュメンタリーをつくり始めて30年ぐらいになるので、世界中のいろんな場所に行ったんですけれども、私は場の持っている力がそれだけ強いところは初めてで、その瞬間に、即座にここを撮りたいと思いました。

何かとんでもないものに触ってしまったという思いを抱いて、そのシンポジウムに行き、これは撮りたい、残したい、絶対そうすべきだという話をしたときに、地元の方から、三池には負の遺産があまりにも多いので、閉山もしたことだし、すべて忘れて次へ行ったらどうかと。「すべて忘れて」と言われました。

その時に、ものすごくショックと怒りを覚えまして、たしかに三池の歴史は、映画にもあるように、囚人労働に始まり、与論島から大量移住をさせての差別労働があり、朝鮮人、中国人の強制連行があって、そして、白人捕虜の強制労働、戦後の争議と事故などで、ほんとうに重い歴史ではあるんですけれども、それを負の遺産と言って片付けてしまうと、そこで必死に生

きて、働いて、闘った人たちの姿はどうなってしまうんだろうと思いました。

それと、三池の歴史は日本の歴史そのものなので、それを消してしまうということは、日本の歴史そのものも消してしまうことになると思って、そこから始まりました。私が聞いた下からの声と、負の遺産という二つの声がかけ算になって後押しをしてくれました。

ただ、私だけではできませんでした。この映画は7年かかっているんですけども、予算を取るだけで3年間かかって。それは大牟田市の行政の中でも残そうと思った方が、「もうだめだからあきらめろ」と言われながら、3年間、まちの人と、役所のなかと、議会と、関係者とを説得して回ってくれた結果でした。それから2年かかって、100人近い方たちの証言を撮りまして、一度つくったんですけども、もともとできた作品が、炭鉱がなくなって、誇りを失った地元のためにつくった作品だったので、炭鉱のない場所の人には、ちょっとわかりづらい作品になっていました。

でするので、もう1回、今度は自分のお金を投じて、2年かけてつくり直したのが今の作品です。もっともっとありますが、短く話すとこんなところですよ。



池内 いまお話のなかで、場の持つ、場が喚起するもの、力というか、それがすごく大きいというふうに語られたと思うんですね。私自身、自分のふるさと崎戸に、ほとんどいま帰っていないんですけども、34年ぶりぐらいで1回ちらっと帰ったときに、三池炭鉱と違って何もないんですね。要するに、やっぱり全部解体されていっていますし、炭住なんかも全然残っていないんですね。炭住の跡はもう芝生がきれいに敷かれていて、緑の美しい、それこそ、いま癒やしの島みたいな感じで、保養地として、国の助成金もあって、ホテルも建つとか、そういう感じになっていっているんですね。

だから、そこでほんとうに生き、闘い、苦しんだ人たちの歴史というのが、もう跡形もないという、その感じに逆に打たれましたね。これはほんとうに何か残しておけばよかったのにと思いました。

炭住がかまぼこ兵舎のように、上から見下ろすと、ばあっと並んでいたとか、炭住の場合の

かまぼこ兵舎みたいに並んでいるところでは、トイレも共同便所で外にあったとか、非常に細かいことを、私は小さいときの生活のなかから思い出しているんですが。

いまでも忘れられないのが、坑内なんかから上がってくる父親たちと、坑口とか、長屋に帰ってきた親たちの顔を見るんですが、その男たちがもう真っ黒で、もちろんすすだらけですよ。しかし、目はほんとうにららんと光っていて、そして歯が真っ白できれいに見えるんですけども、それがすごくおっかなくてですね。幼いときに、男たちがわあっと真っ黒に上がってくると、怖くてね、私は泣いて、母親のエプロンの陰に隠れたりというような感じで見たことがあるんですね。

場の持つ力というのを先ほど考えていたんですが、親たちが暗い地底の底から上がってくるときに、単にすすだけの汚れじゃなくて、何か靈気をまわりつかせながら上がってくる。つまり、何かやっぱり地の底というのは、それこそ墓でもあり、死者たちが葬られるところでもあり、そういうところの何か靈気みたいなものがまわりついて、そして上がってくるという感じがあります。

いまあのとき感じた恐怖についてとらえ直そうとすると、そう思うんですが、子ども心におっかなかったのは、そのようなある種の異様な力に打たれたからだと思います。その人が単に上がってくるというよりは、何かその地の底のにじみ出るようなものをまといつかせながら上がってくるという、そういう感じがしたんですね。

今日ドキュメンタリーを見ながら、やっぱりそのへんが、昔、炭鉱マンだった人たちが語るときとか、自分たちがどういう労働工程でやっていたかというようなことも併せながら聞きますと、ほんとうにそのへんがにじみ出る作品にもなっているなと思ったんですね。

神谷さんも、この映画に対して感想がたくさんありだと思いますので、質問も含め、少し話していただけませんか。

**神谷** 神谷と申します。よろしくお願ひいたします。

熊谷さんとお付き合いは、先ほどおっしゃられた『ふれあうまち』（1995年）という映画を京都で上映できないかという相談を受けたことからはじまりました。以前に支配人をしていた京都朝日シネマで、というお話で結果的には上映ができなかったんですけども。その後もいろいろお付き合いをさせていただいています。

熊谷さんご自身の、このプロフィールのなかに、「右手にカメラ、左手に子ども」というのがキャッチフレーズと書かれています。子どもを産んで、現場で仕事を続けるというのは、今でも大変かもしれませんが、テレビの現場は、もっともっと大変だったと思います。子どもを産んでも仕事は続ける！という決意表明なのですが、私も子どもを産んだ直後で、保育所と職場と家とを行ったり来たりしていて、熊谷さんの生き方にとっても共感しました。そして、もう10年以上の長いお付き合いになりますね。

この『三池 終わらない炭鉱の物語』のことも、作品にされるだいぶ前からお話をうかがっていました。ぜひ劇場で公開する映画にしたいと言われていたので、期待していた作品でした。

いま池内さんから、「場」の話というか、地の底からわき上がってくる炭鉱というイメージ、その「場」の勢い、イメージに圧倒されたというお話がありました。熊谷さんが言われた「歴

史を消してしまわないということが大事だ」という点、炭鉱という“場”と歴史その二つの視点がこの映画の大きなポイントではないかと思います。映画館で公開した時も見ましたが、あらためて今日見直して、「炭鉱の町、その歴史を消し去らないことの大事さ」を感じました。

それともう1点、特にこの映画ですごく重要だと思ったのは、労働運動のなかで女性たちがどういう役割を果たしてきたのかということ、きちっと聞き取りをされて描いている点です。それが映画のなかの柱の一つになっている。後半部分は特にお母ちゃんたち、女たちがどれほどに重要な役割を担っていたかがわかりますよね。CO中毒の話が出てきますが、意思の疎通が出来なくなってしまった夫を抱えてどれほどの言い尽くせない苦労をしたのか。しかも、まだ現在続いている話ですよ。その点が、男性の監督が撮ってきたドキュメンタリー映画との決定的な違いです。そういう視点があるから、いまでも続いている問題として、タイトルも『終わらない炭鉱の物語』になったのではと思います。

ですから、歴史は、例えば、遺跡として残すとか、世界遺産として残すとかという意味でのかたちとして残っているものはありますが、そこで生活する人たち、その日々の暮らしは、その風景がどんなに変わろうがずっと続いていきます。この映画のなかでも、映画のエンドマークが出てもずっと続いている、ということを描いた。その点も、たくさんあるドキュメンタリー映画のなかにあっても、特にこの作品の素晴らしいところだと強調したいです。



**熊谷** ありがとうございます。その女の人の話なんですけど、私自身も、やっぱり炭鉱というのは、暗い、汚い、苦しい男の世界だとずっと思い込んでいたんですけども、たまたまこの映画に入る直前に、『炭坑美人』<sup>2)</sup> という写真集に出会いました。

私の友人のカメラマンが、これは男のカメラマンですけども、何年もかけて、筑豊の炭鉱住宅に住み込んで撮ったものです。かつて日本には、女の炭鉱婦がいました。三池は大炭鉱だったので、1930年の時点で女炭鉱婦はいなくなっているんですけども、筑豊は、コヤマが多かったものですから、女の炭鉱婦がたくさん、法律で禁止されたあとも、まだいました。ただ戦争末期、男達がいなくなった時に、もう1回、日本で女炭鉱婦が復活した時代はあるんですけど

ども。

かなりの数の女炭鉱婦たちの、にっこり笑った顔と、聞き書きをとった写真集なんです。もうこれほど過酷なことはないというぐらい、話している内容はすごいんですけども、そのばあちゃんたちの笑顔が抜群の笑顔なのと、その過酷さをぶっとばすだけのすごいエネルギーと迫力があって。それを見たときに、何だ、炭鉱というところは男の世界じゃないんじゃないかと思って。あれはターニングポイントだったですね、その写真集を見ているか、見ていないかというのは。あれに出会った瞬間に、これは女の世界じゃないかと思ったし。それに、実際に話を聞いていると、ほんとうに女の人たちがすごく魅力的で、巻き込まれていったというか、とにかく、ものすごくすてきな人たちにたくさん会いました。

**池内** 森崎和江さんが書いておられる『まっくら』<sup>3)</sup>という本がありますよね。そのなかでも聞き書きをかなりていねいにやっておられるんですね。あれを読みながら、ああ、私たちは戦後の炭坑とか、近代化のなかでも、いわゆる荒くれ男たちの労働現場であったとしか、イメージしていないわけですけども、そこでそういう女性たちが働いていたし、実際に、ほんとうにたくましいという、ひとことでは言ってしまうと簡単なんですけれども、今日のドキュメンタリーでも触れられていたように、乳飲み子を抱えながら労働するという状況が実際あったわけですね。それはたいへんなことで、あの穴の中に入って、おっぱいからお乳が出ても、それを飲まることができないというような感じの労働ですよ。

でも、それでもほんとうに、そうやって女も一緒に仕事ながら、しかも、女性自身がすごい熟練鉱夫で、先山（さきやま）、後山（あとやま）というふうな組み方をして坑内に入るわけですけども、先山も「すかぶら」（さぼる）というか、怠け者の先山だった場合には、自分から捨てて、ほかの先山を選ぶとか、けっこう主導権を握りながら、しっかり労働もやっているという感じがするんですね。

『まっくら』を読んだり、上野英信さんの書いた『追われゆく坑夫たち』<sup>4)</sup>とか、そういう本を読みながら、あらためて認識させられたことですが、ああ、ここにこんなにすごい、力強い労働があったということですね、男も女も含めてね。

それから、神谷さんが言われたように、やっぱり家族一体になって、とにかく防衛しないと成り立たないような生活というか、そこが何か基本的な力だというふうに思っていたんですけどもね。

**熊谷** この映画をつくりながら、仲間という言葉であらためて私はすごく意識し直しましたね。

映画の中でいくつか、私自身が好きなシーンがあって。九十いくつになる西脇仲川さん(<http://www.cine.co.jp/miike/speech.html>)というおじいちゃんが、「みんな仲間だ炭掘る仲間」という、とてもいい歌なんですけど、これを歌いながら泣くシーンがあります。「事故に遭ったら、一組もない、二組もない、助け起こす」というところが、とても私は好きなんですけれども。私も「7年間長かったですね、よく続けられましたね」としばしば聞かれるんですけども、自分一人だけで来たわけではまったくなくて、仲間がいて支えてくれたということだし。

三池争議は1960年なんですけど、ほんとうにあれだけ分かれてしまうと、その尾を引きずって

いて。私たちは2001年から2003年に撮影しているんですが、対立がまだ色濃く残っていたんですね。今も大牟田駅の近くの小学校に、男の子と女の子が手をつないで立っている像があるんですけども、当時つくられた像で、大人たちはああやって分裂をしたけれども、せめて子どもだけは仲良くという思いを込めてつくられた像があります。その状態がずっと続いたわけで。それを私たちがいかに解きほぐしながら撮影していくのかも、すごくたいへんだっし。

それと、時期でいうと、あれより前だと撮影ができなくて、あれより後だと、またできなかった。というのは、これを撮ってから、もう10人近くが亡くなっています。だから、ほんとうに遺言のような作品になってしまっているんです。特に、三池争議の鍵を握っていた方が、撮影してから1年間以内に次々と亡くなりまして、新労をつくった山下一二さん、会社側と三池労組の闘争資金が220億対22億という話をしていた久保田武巳さん、ブローニングの拳銃を持ち出したという話の宮地巖さんがなくなり、それから、会社側で分裂工作をした大澤誠一さんが亡くなるという、ほんとうに撮影してから1年か2年ぐらいですね。

それから、はあはあと苦しそうななかで話をしてくださった、じん肺患者の奥村國夫さんも。最初の上映会に、がらがらと酸素ボンベを引いて見に来てくださって、それから1年ぐらいしてから亡くなられましたし。そして三村孝一さんというCO中毒の患者さんを誠心誠意診ていらしていたお医者さんがいるんですが、あの方が3年ぐらい前にがんで亡くなりまして、ただ、幸いお嬢さんが精神科医なので、引き継いで、同じように診ていらっしゃいます。

それから、去年の4月に、受川孝さんという、最重症で寝たきりだった一番若いCO中毒の患者さんが、事故から40何年間、植物状態のまま、あのままで亡くなりました。

だから、ちょっと撮影の時期がずれていたら、何も証言は撮影できなかったということだと思います。ただ、女の方は、ほんとうにみなさんお元気ですね。

**池内** まあ、ずっとケアをし続けておられるということですよ。いま、次々と亡くなられている方の話をうかがったんですが、ほんとうに貴重なタイミングで、きちっと撮れたということですけども、先ほど、91歳のどなただったかな。

**熊谷** ええ、西脇さん。

**池内** 歌を歌われますよね。同じ『炭掘る仲間』という。あの方も、自分の奥さんが、第一組合にとどまれというふうに、しっかり言ってくれたんだということをおっしゃってましたよね。何か、女性がちょっとバックにいて、一所懸命、夫を支えつつ、その支えつつというのが、ある種の働く者同士の倫理、仲間意識とか、それを大切にするといいところに立った支えというのがいいなというふうに思いました。

しかも、熊谷さんは、ちゃんとそこらへんを押さえながら、やっぱり女性が支えるという側面を、そういうかたちで残されているということに、私も神谷さんをご指摘されたようなことで、すごくいいなというふうに思ったんですね。

もう一つは、やっぱり、私も感想を言わせていただきますと、分断ね、組合が第一組合、第二組合の闘いになりますよね。分裂を画策していたというところで、監督が迫っていくところ

がありますね。熊谷さん自身がちょっと前面に出るようなかたちで、大澤メモでしたか。

そのメモを丹念に読みながら、いわゆる、第二組合の人を集めるときに、自分たちの第二組合のほうに集まる人たちに、弁当代でもないけれども、お金を出していませんでしたかと迫るところがありますよね。あのへんは、とても面白いなと思いました。

問われたほうが、やっぱり、うっと、そこは非常に答えに詰まりますよね。詰まったところを延々と、きちっとその表情を撮っておられて。やっぱり、いわゆる第一組合、第二組合、どちらも生きるのに必死で、そして経営もつぶさないようにしながらやりたいということでの路線の違いがすごくはっきり出ている、そこを見逃さず撮っておられたと思うんですけども。

第一組合側からすれば、ちょっともの足りないとか、あるいは、第二組合の側からすればどうだとか、いろんな評価が出てくるんじゃないかなと思うんですけども、熊谷さん自身が、ある種迫るような感じで、メモをきちっと見ながら、メモに基づいて、これはどうですかというふうに迫っておられたのが、一つ面白いなと私自身は思ったんですね。ちょっとずれますが。

**熊谷** いや、あれは迫るといふより、たまたまそうなっているんですけども。舞台裏を明かすと、あの方は富山にお住まいなんですよ。

私たちは普段はすごくていねいなやり方をしている、私は東京にいるので、一緒にやっていた大牟田市の石炭産業科学館のスタッフが、彼らからこういう人がいますよということもあったし、私からこういう人はいませんかということもあったんですけど、最初に行ってくれて、ていねいなレポートを下さるんですね。それで、2回目に私が一緒に会いに行き行って話す。3回目に撮影する。テレビじゃ絶対にそういうことはやらないんです。それはもう極めてていねいに、信頼関係を築くというやり方をしているんですが、富山にお住まいだったので、連絡だけして伺ったわけですね。

たぶん、あの方も、やっぱりどこかでしゃべりたかったんだと思うんですね。前日まで病院に入院していたんだけど、強引に出ていらして。

それで前日に打ち合わせにだけ行って。大澤メモというのは、断片的には世の中に出てきたんですよ。だけど、全部は出てはいなかったんですね。あるのは知っていたから、どうしたのかなど。話をしながら、大澤さん、あのメモどこですかと聞いても、「いや、どこかなあ」って、あの調子で「どこかなあ」と。

ラッキーだったのは、そこへ奥さまがコーヒーを持って出ていらして、隣にいた石炭館（石炭産業科学館）のスタッフが、「奥さん、あのメモどこですか」「あら、そこよ」と。大澤さんのすぐ後ろの本棚に、実は置いてあったんですよ。何だというんで、それで、「じゃあ、貸すよ」と言われて。だから十何冊あるメモを、一晩だけお借りしたんですよ。わあっと手分けしてみんな読んで。だから、もう付せんがぺらぺら付いている。読み込んだんじゃないで、ものすごい勢いで読んだんですね。

それで、人気のないホテルのロビーに、午前4時か5時に集合して、それぞれ分担を決めたやつを、もう1回みんな読んで読み直しをして、それで決めたというぐらい。だから、逆に言えば、そういう緊迫感はあった。読み込んでしまうと、むしろ緊迫感がなくなったかもしれないですね。撮影が終わってから、あきれてまた全部貸してくれましたけど。



**神谷** いや、あの撮り方は、ご本人は意識されていないかもしれませんが、米国のマイケル・ムーア監督は、アポなし突撃取材の手法で知られていますが、そんな感じですよ。熊谷さんは、アポイントメントはされていると思うんですけども。

マイケル・ムーア監督の作品は、みなさんももうご覧になられたことがあると思います。『華氏911』（2004）とか、『ボーリング・フォー・コロンバイン』（2002）とか。初期の作品は『ロジャー&ミー』（1989）で、まさにいま、国、アメリカによってサポートされたGM（General Motors）という会社の会長に会いに行くというドキュメンタリーでした。彼の生まれた町が、GMの工場の町だったので、さびれていく町に対してコメントをもらおうとした。何かそんな雰囲気はただよっていましたね。

**熊谷** はははは。

**神谷** いや、まあ、それぐらいの勢いをよい意味で感じました。

で、先ほど池内先生もおっしゃられましたけど、いまだから話せるという意味での本当にギリギリのところで成立している映画だと思うのです。いろんな人の力が集まってきたからこそ、完成できたと確かにそう思います。いまの時期でなければ出来なかった作品ですよ。そのタイミングというのは何でしょうね。監督ご自身が突き動かされたこと、周りの人たちも作って欲しいと思っていた、そうしたいくつもの時間軸的なものが重なり合い、幸せな形で作品を作り上げた。

第二組合の方たち自身が、当時の克明な第一組合切り崩しの工作の事実を証言する、それを映像で残すというのは、今だから出来たことですよ。例えば10年先では遅い。そういう意味でも非常に貴重な証言の盛り込まれた作品だと思います。

日本では今大きな労働争議は起きていないですけども、使用者側と労働者側が対立したときに、一体どのようなことが起こるのかという一つの貴重な証言がこの作品にある。使用者側、権力者側がやることは、三池闘争当時とおそらくまったく変わらないですよ。

さきほどの、ムーア監督の『ロジャー&ミー』のときの労働者と会社側の対決の状況とかも、お金で解決するとか、あるいは労働者を人間と思っていないとか、その構造というのは基本的にほとんど同じでした。洋の東西を問わないんだ、とあらためて思います。

**熊谷** つくっているあいだじゅう、「今さら何で三池？」と、ほんとうによく言われたんですけども、あらためて今、格差のこととか、雇用の問題とか、いろいろなことが起きてきて、ほんとうに今だからこそ三池と、つくづく思いますね。

**池内** そうですよ。



神谷 女性の話に少しまた引き戻すと、一方で、ちょっとどなたが言っていたか忘れてしまったけどというか、主婦の会ができて、崩れていくのも、女から崩れていくんだという、その“1万円生活”ですよね。で、そこもちゃんと押さえていらっしゃって、写真をずっと素人で撮っていたという、あの料理屋さん。レストランのご夫婦の貴重なお話もありましたよね。

池内 ああ、ありましたね。

神谷 ここで工作をされてたんですという話しはリアルでした。やはり、生活を守っていくことの根本に、働くことを選んでほしいと言われていた。やっぱり奥さんが、ぎりぎりのところでお父ちゃんに選択を迫る、でもその一方で、そういう選択を迫らせたもの（使用者側）に対する憤りというもの、すごく感じました。

熊谷 三池争議を描いた作品というのはこれまでもあるんですよね。だけど何を見ても、この「生活」が全然出てこなかったんですよね。イデオロギー中心でそのあたりが欠けていて、これを見た方が、いろいろ評価してくださるのはそこだろうなと思いますし。

東京で公開を始めたときに、私たちは正直言って、これは誰が見るんだろうと。つまり、地味な炭鉱の映画の、地味なドキュメンタリーなわけですから、誰が見るんだろうと。つくったときにほんとうに思ったんですよね。いや、笑っている人がいますけれども、ほんとうに私たちはそういう感じで。

**神谷** でも、意外や意外、というか、予想外にたくさんの観客が来られた。京都も、もちろん上映しましたが。

**熊谷** はい、していただきました。

東京の小さな映画館の、モーニング上映という、1日1回だけの上映から始めたんです。そうしたら、1日目から立ち見が出て、それも驚いたんですけども、公開初日には、『ぴあ』という情報雑誌の人たちが、各映画館をアンケートを取って回るんですね。

それで、ふたを開けたら、その週に公開の映画の中で、何とこの『三池』が満足度アンケートで2位になって。3位がハリソン・フォードのハリウッド娯楽大作で、ざまあみろ、ハリソン・フォード、やったぜみたいな感じだったんですけども。その時、ほんとうに日本はまだ捨てたもんじゃないわねとつくづく思っ。そして観客は炭鉱体験世代だけかなと思ったら、そのうちに若者たちの姿が日に日に増えてきて。

すごくびっくりしたのは、彼らはこういう映画をカップルで手をつないで見に来る。見て、びゃあびゃあ泣いているんですよ。なぜ泣いているのと聞くと、自分たちが、これまでどういう生き方をしてきたのか、突き付けられたと言って、涙を流しているんですね。

かと思えば、三池というと、炭鉱とは全然関係なく、三池崇史と書いた人がほんとうにいて、『三池』が三池崇史だと思って、絶対信じて映画館に入ってきた若者がいたんですよ。三池崇史のドキュメンタリーだろうと思って。

**神谷** 三池崇史というのは映画監督で、最近でいうと『ヤッターマン』（2009）の実写版を監督された方です。

**熊谷** その彼が見終わって、「僕、知りませんでしたけど、間違えてよかったです。見れて」と言ったというぐらい、三池とは、その世代の若者には全然縁がなかったんですけど。何だかとにかく増えてきて、間違えてくれてよかったなと思いました。

**池内** いろんな裏話も含めて聞けそうなんですけれども、私も自分のふるさとの崎戸が、全然知らなかったんですが、撮影のロケーションとして、『バトル・ロワイアルⅡ』（深作欣二・深作健太監督、2003）という映画で使われたところらしいんですよ。全然、それを知らなかったんですけど。

やっぱり、検索して、インターネットで調べると、そういう情報が出てくるんですね。だから、いろんな情報を得て、若者たちもそういうので、ひょっとして見にくるかもしれないというようなことは、この『三池』の場合でもあるかなというふうに、いま聞いてて思ったんですけどもね。

**神谷** その後の地元のみなさんのことを教えていただけますか？この作品を、地元のみなさんがどんなふうに関わられたのか、その後どういふふうに変化されたのかを、ぜひお聞かせいただきたい。

熊谷 ドキュメンタリーなので、撮れたもの、撮れなかったものというのはたくさんあるんですけども、撮れてよかったなとつくづく思っているのは、朝鮮人で強制連行された方です。あの方は普段、日本人社会のなかで、日本名で暮らしていらっしゃいます。ですので、ああいふかたちでご自分の体験を、ほんとうの名前で公にされたのは初めてのことでした。

だから、私たちも正直言って、答えていただけるのかどうかわからなかったんですが。彼の場合はいねいにやったというよりは、1回目で行って撮ったんですけども、終わった後にああやって、「すかつとした」と言っていただけで、すごくよかったなと思いました。

あと、撮れなかったものでは、あの中でたいへん印象的なのですが、CO中毒の夫を持つ妻の方が集会で、「365日かける38年、言葉にならない」と言っているらしいです。もう一度あの方にお話を聞きたい、電話をしました。そうしたら、私たちと会うことすら、仲間うちで話をされて、やっと会っていただけました。

今でも非常にきれいな人ですが、当時、ほんとうにきれいな方で、かつおなかに赤ちゃんがいたというマスコミのかっこうの材料になってしまって、非常に嫌な追いかけられ方をした体験もあって。

ただ、一度会うと決めてくださったあとは、他の妻たちとも一緒にとお会いしたんですけども、ほんとうにあれだけ、語るほうも、聞くほうも、涙涙であった経験はありません。40年間、うちのなかにおしかくして、外に出さずに仲間だけで話してされていた思いを、ほんととぶつけられてきて。

中心に話をされている、松尾蕙虹さんという方がいます。あの方の夫は亡くなりましたけれども、今だにあのように、家で暴力を振るうとか、もの忘れがひどいとかいう夫を抱えつつ生きている妻はいます。

その様子を撮らせていただきたいとお願いをしました。妻たちの方はもう覚悟を決めて、「言いたいことはたくさんあるので、私たちも言いますし、全部正直に撮ってください」とおっしゃったのですけれども、夫の家族が、どうしてもやめてほしいということがあって撮れなかったことがありました。

それと、患者さんご本人も、撮らせてくださいとお願いをした時に、見た目は病気とはわからない状態ですので、ただでさえ誤解をされているわけです。そのなかで映画になんぞ出たら、元気だと思われて、医療給付金を打ち切られるに違いないという恐れで、出てくださらない方もいました。

ただ、地元で変わったというふうにも思っていることがあります。最初にできたのは2003年なんですけれども、地元で初公開したときは、何百人も入る会場のあちこちから嗚咽が漏れてきて、涙が伝搬するかたちになって、最後は半数以上が泣いていました。

ただ、それでもその時点では、10年早いという声はかなりありましたし、傷あとに火ばしを突っ込むようなものだと言う人もいました。ただ、つくり直しをして、全国でいろんなかたちで評価されていったときに、人々の考え方が変わってきました。

毎年、いつも閉山の日に、地元で上映会をしています。一番印象的だったのは、去年、若い女子学生のアンケートで、親に連れられて、嫌々見に来たと。自分は閉山しか知らないのに、何とつまらない、さびれた嫌なまちだと思っていた。ところが、この映画を見て、ほんとうに

このまちで必死に生きた人たちがたくさんいて、まちに誇りを持てるようになった。だから、自分が母親になっても、また教師志望らしく、教師になっても、絶対子どもたちに見せたいという答えをいただきました。

そして、つくってくれてありがとうと、これだけ多くの人から言われた経験はありません。それは大牟田も含めて炭鉱の方が多かったんですけれども、やっぱりどこか、炭鉱で生まれ育ち、働いているということで、炭鉱コンプレックスがある人たちがいた。それがこの映画を見て、誇りを持てるようになり、炭鉱の出身と堂々と言えるようになった、と。

それから炭鉱ではないけれど、関東の鉱山で育って、閉山という言葉そのものが、おまえら知らないよと言われている感じがして、すごくつらかったと。だけれども、この映画を見て、自分のふるさとのことを友人たちに言えるようになって、単なる主婦の方だったんですが、上映会を開いてくださったということもありました。

また、映画をつくって上映するということが、理解と和解につながる非常に珍しいケースでした。というのは、さっきも言いましたけれども、三池争議であれだけぶつかり合ったしこりがすごく残ってしまっていて。ある映画祭で言われたんですが、自分は争議には行かなかったけど、仲間が行って、ほこほこにされて戻ってきたので、ずっと40何年間、相手を憎み続けていた。だけれども、今日、この映画を見て、その憎悪の気持ちが溶けたとおっしゃった方がいて。ほんとうにいろいろなことがありました。

**池内** もういまのお話で最終的なまとめのような、いい言葉を聞かせていただいたと思っているんですが、神谷さんも、ちょっと一言。

**神谷** 私は映画を上映するという仕事をし、かつ、大学では映画産業とか、映画の話を、学生のみなさんにしています。今日、熊谷さん、池内さんと一つの作品について話をする機会をつくっていただき、あらためて映画について考えています。

映画って、例えばこの作品だと、熊谷さんが7年間かけて、110時間以上の素材があって、その中から1時間40分余りにまとめた。削ぎ落としてまとめていかれているわけですね。その映像から、私たちが何を受け止めるのか、ということ。そこは、自分自身の心の引き出しを増やすことではないか、と思っています。自分の知らない世界を受け止め、いったん心の中にしまっておく。そのしまった引き出しがたくさんあればあるほど、心豊かな人間になっていくのではないかと思っています。必要なときに、あけることができます。

特に日本を素材に、日本でつくられているドキュメンタリー映画は、先ほどの繰り返しになりますけれども、「表の歴史」、いわゆるメディア、マスメディアが伝えてきた歴史ではなく、伝えて来なかった、いわば「隠れた歴史」をすくい取るようにして、記録として残している作品が多い。ですから、そういうものを、やっぱり私たち自身がきちっと受け止めるだけの基礎体力を持ちたい。いつも映画を見るときにそう思っています。

この『三池 終わらない炭鉱の物語』も、知らないことをいっぱい教えてもらった作品です。この映画で受け止めたことを、私たち自身が自分の日常のなかで、どう生かすのかですが、それは具体的に何か行動することではなく、友だちに感想を話すとか、家族と話をするとか、そ

ういうことでよいのです。少しでも伝わることで、また少し世界が広がるのではないのでしょうか。

こういう作品は、先ほども何回もおっしゃっていますが、地味で、宣伝もほとんどされず、みなさんの口コミだけが頼りで伝わっていく映画です。大宣伝されている映画だけではなく、こういう映画を探してみるということも、とても大事です。そういうアンテナをいろんなかたちで張っていただきたい。

熊谷さんご自身、これからまだまだトライされたいテーマをお持ちです。京都と縁があるテーマでいうと、私もあらためて調べた女性監督ですが、<sup>5)</sup>坂根田鶴子さんという日本で初めての女性監督のことも追っかけておられます<sup>5)</sup>。日本の映画史のなかではほとんど何も語られていない監督ですね。

京都で生まれて、京都で育って、溝口健二の弟子としていくつかの作品に関わり、その後、映画を撮りたいために満映（満州映画協会）に行き、そこで終戦を迎える、1年以上、現地に住まって、仕事をし、帰国後、京都の松竹の撮影所で仕事をされるのですが、満州での実績があっても、映画監督にはなれなかった。一スクリプター（記録係）として生涯を終えた女性です。坂根さんの話しも何とか形にしたいと思ってらっしゃいます。

こうした企画実現の後押しが、このような機会をたくさんつくっていただくことだと思います。ですので、ぜひ、これを機会に、熊谷博子監督のこと、ドキュメンタリー映画のことに関心をもっていただきたい。

**熊谷** いつも最後に私が言っていることを、神谷さんが言って下さいました。

実は『三池』も、110時間以上撮っていて、ごく一部しか出してないんですね。特に女の人の話は、すごいんですよ。

さっきも言っていた、家族が絶対にだめと言った方も、最近撮れるような状況になってきたので、少しずつ撮りたいと思っているんですが、お金がないというのが正直な感想です。だから、撮りだしてはいるんだけど、全然続いていない。どうしようねと思っています。いいと思って下さったら、あちこちでよかった、よかったと叫んでいただくというのがありがたいですし、上映会もしていただければ、すごくうれしいです。

それと、映画をつくった後に、今またあらためて本を書いています。

そうすると、私はこれまで何をしていたんだろうかと、実は。こうやって映画をつくったから、あなたはわかったでしょうと言われるけれど、冗談じゃなくて、私はもしかして何もわかっていなかったんじゃないかなと、思っているところです。それほど奥が深い。

例えば、これは今、一番怒っている言葉なんですけれども。炭じん爆発事故で、あれだけの、400人以上の死者、800人以上のCO中毒の患者さんを出して、三井鉱山の幹部は「鉱山保安法」違反と、業務上過失致死傷と殺人罪で訴えられるんですが、不起訴になっています。不起訴にする前に、原因は掃除されずに積もった炭じんだ、というちゃんとした鑑定書があったんですが、それがまず闇に葬られる。それは政界、学会、財界、法曹会、全部束になって、それを葬ったというような事実があります。

そして、中心になっている松尾蕙虹さんたち、家族の会が、不起訴になった後、なぜ不起訴にしたのかという理由を聞きに、福岡の地方検察庁に行った時に、次席検事が言った言葉がも

のすごい。「労働者一人一人が社会に対する貢献度は非常に低いけれども、三井鉱山のような大会社が社会に貢献する度合いはたいへんに高いので、その損失を考えて起訴しなかった」と言ったんです。

記録にも残っていて、彼女も書いている言葉なんですけれども、それを最近発見しましてね。ただ、これは今もあるんじゃないと思うわけですね。当時のことではあるけれども、あらためてもう1回、振り返ったときに、今私たちが置かれている状況とどこが変わっているんだらうかと、つくづく思っ。もちろん私は過去を描いたわけではなくて、未来につながるものとしてこの作品をつくったんですけれども、自分たちの位置とか、社会とかを考えながら、映画と対話をしていただけたらすごくうれしいなというふうには、今すごく思っています。

**池内** 財界，学者，政界，癒着で束になってというのはいまも進行中のことですし、私たち自身がそういうなかに置かれていることなので、そこはきっちりほんとうに考え続けたいなというふう思うんですね。

もう少し時間がありますか。あと3分、4分あるようですので、先ほど触れられた点にも、ちょっともう1回戻りながら話をしたいと思うんですが、いわゆる、いろんな感想がやっぱり、観客のなかから出てきて、それに、逆にまた力づけられるということのなかで、炭鉱コンプレックスとかね。

最初、歴史的には炭鉱は囚人から始まってというふうなことがありますね。そのなかで下罪人というような言葉もありますし、いわゆる犯罪者とか、流れ者とか、強制連行された朝鮮人、中国人というようなかたちで、彼らがほんとうにその労働のもっとも過酷なところを担いながら、いわゆる近代化を進めてきたという、日本の社会の一つの大きな歴史のなかの根っこに、そのことがあるというふう思うんですけれどもね。

私のふるさとのことばかり言っていて恐縮なんですけれども、やはり、当時、崎戸炭坑の最盛時期で7千500人の従業員がいて、そのうちの3千人が朝鮮人なんです。だから、それこそ4割の、強制連行を含めてやっているというような状況だった。

それで、もうほとんど未払い賃金とか、最初に首を切られたり、一番危険な払い、切羽（きりは）に配置されて労働させられるとか、そういう状況がずっとあったわけです。だから、負の遺産というのがやっぱりひとこと言われてしまうんですが、今度、熊谷さんが書かれているのが、『負の遺産って何なのさ』という光文社新書で、お手元にもチラシがあるかと思いますが、けれども。やっぱり、もう1回それを掘り起こし、新たな視点で考え直す必要がありますね。先ほどから出ているような、いわゆるメインストリームの癒着型のそういう思考法を脱して、未来を切り開いていくという、そういう方向に一步踏み出したドキュメンタリーだったというふうに思いますし。

今日、先ほど言われた松尾蕙虹さんの、いわゆる次の闘いですよ。現在も続いている、しかし、次の闘いでもあるわけで、こういうものをきちっとやっぱり見届けるということを、ぜひしていただきたいなと思いますけれどもね。重荷であるかもしれませんが、私たちも、それを引き受けながら、共有しながら考え続けていけたらなというふうに思っているところなんですけれども。



熊谷 でも、闘うという、やっぱり一人ではできないんですよね。これは本にも書くんですが、今、三井鉱山という会社はなくなったんですけども、映画ができたときに、何か所か削ってほしいという申し入れがありました。だけど、行政サイドが跳ね返したんですよね。これはすごいと思いました。

よく行政と組んで何とかと言われたんですけども、一緒に組んでいた当時の石炭館のスタッフが素晴らしくて。これをとにかく伝えたいんだという。それで、切ってほしいと言われた箇所は、強制連行された朝鮮の人が、愛国貯金を取られてしまったくだり。それから、じん肺患者のハアハアの息が長過ぎるから削ってくれとか、受川さんが21歳で若かった、年齢を削ってくれとかね。それから、家族じゃない方が面倒を見ている、あそこも削ってくれというのがあったんですけどね。とにかく、最初の時点でそういうのがいくつかあったんですね。だけれども、事実ですから削れませんとお答えして。では協力タイトルをはずしてくれと言われて、いえ、協力していただいたんだから削れませんというふうに、いくつかそういうやりとりがあったんですね。

だから、べつに私だけが頑張ったわけじゃなく、これを伝えるんだという、いろんな人たちが、いろんな具合にほんとうに頑張ったし、思いがやっぱり強かった。それのかけ算になっていた。ということは、インタビューする側とされる側との共同作業だと思っているんですよね。みんなと一緒に作りあげた作品です。そういう仲間で作った作品です。だから、私を監督と呼ばないでくれというのは、その意味もあるんですけども。ほかのタイトルがないので付けてしまうんですけど、「一番走り回った人」とか、そんなタイトルがいいなという感じは私はしています。

ということで、今日もここで皆さんと仲間になれたんで、よろしくお願いします。

池内 どうもありがとうございました。フロアのみなさんからも、ぜひ感想をいただきたいところですが、Ⅲ部のあとに質疑応答の時間を少し予定しておりますので、そのときに監督にぜひという話がありましたら、お聞かせいただきたいと思います。長時間すみません、どうもあ



りがとうございました。

中川 熊谷さん，神谷さん，池内さん，どうも長時間ありがとうございました。長時間と言いながら，あと3倍ぐらいは時間を設ければよかったかなと思っております。

いまアナウンスいただいたとおり，第Ⅲ部の研究報告が終わったあとに，フロアのみなさまから熊谷監督に質疑応答の時間を設けたいと思いますので，ぜひ最後までお付き合いください。

#### 注

- 1) 池内靖子「私のふるさととは炭鉱だった」(『ナヌムの家』を京都で観る会編『いま，記憶を分かちあうこと—映画『ナヌムの家』をとおして「従軍慰安婦」問題を考える』素人社，1997年，pp. 84-85. 所収)
- 2) 田嶋雅巳『炭坑美人 闇を灯す女たち』(築地書館，2000年)
- 3) 森崎和江『まっくら 女坑夫からの聞き書き』(理論社，1961年)
- 4) 上野英信『追われゆく坑夫たち』(岩波書店，1960年)
- 5) 『日本初の女性監督 坂根田鶴子を追って』(熊谷博子監督，2004年)